

## 30～40歳代未婚者の意識と不安 ——自由回答の検討

久木元 真吾

(公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員)

本稿は、30～44歳の全国の未婚者男女に対する調査の、現在の生活や将来についてたずねた自由記述形式の質問に対する回答を素材にして、彼ら／彼女らの意識について分析を試みたものである。回答の中で用いられた単語の出現頻度を調べると、男女とも最も多かったのは「不安」であったことから、特に未婚者が抱く不安についての記述に注目し、仕事、親の介護、病気に関する現在と将来の不安について、具体的な記述の検討を通じて考察した。その上で、課題として、年齢のタイミングを限定しない形で新たなキャリア形成を可能にしていくことや、さまざまな事情を抱えながらキャリア形成をしていくモデルをつくることの必要性などを指摘した。

### 1. はじめに

「結婚できるかもわからないし、将来生活できるほどのお金があるか不安である」(31歳女性)

「年金問題や親の介護、自身の仕事など将来についての不安が多い」(39歳女性)

「両親も年だし、自分もアルバイトで給料は安いし、持病もあるしで、この先すごく不安」(41歳女性)

「会社の将来に不安を感じている」(31歳男性)

「親の介護、自分の将来が不安。結婚したい」(38歳男性)

「自分のキャリアや、所得や貯蓄が多くないことに不安を感じている」(43歳男性)

本稿は、30～44歳の未婚者たちが、自らの現在や将来の生活についてどのように考えているのかについて、調査を通じて得られた彼ら／彼女らの言葉を手がかりに考察するものである。上に挙げた例のように、自由回答の記述の中で多く見ることができなのが、不安を語る言葉である。以下で進める

考察においても、「不安」が重要なキーワードとなる。

晩婚化の進展や生涯未婚率の上昇の中で、かつてなら既婚者が多数を占めていた年齢でも未婚でいる人が多くなり、30～40歳代の未婚者は、日本社会の中で例外的な存在でもなければ、特別な存在でもなくなっている<sup>1)</sup>。多数派ではないかもしれないが、無視することができるレベルではもはやない、社会の中にごく普通に存在する人たちとみるべきであろう。

結婚するという事は人生において大きな出来事であるかもしれないが、結婚していないからといって、その人の人生が大きな出来事の不在としてだけとらえられるべきではないだろう。そこには当然、未婚ということだけに還元しきれない、その人たちなりの多彩で複雑な経験があるはずである。特に30～40歳代ならば、仕事やキャリアについてであれ、親との関係であれ、その年齢ゆえのさまざまな生活上の課題や将来についての思いもあるのではないだろうか。

以上のような問題意識のもとに、本稿は、質的

図表-1 「特になし」という回答と生活満足度の関連

性別	自由記述の内容	どちらかと		どちらかと		合計	人数
		満足 している	いけば満足 している	どちらとも いけない	いけば不満 である		
男性	具体的な記述あり	4.2%	25.2%	24.3%	24.8%	100.0%	614
	「特になし」	2.9%	27.0%	37.7%	19.6%	100.0%	515
女性	具体的な記述あり	3.4%	33.9%	26.5%	22.2%	100.0%	771
	「特になし」	6.3%	36.3%	31.4%	19.6%	100.0%	347

注: 男性:  $\chi^2=33.583$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=4$ 女性:  $\chi^2=20.588$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=4$ 

図表-2 「特になし」という回答と将来の不安との関連

性別	自由記述の内容	よく	やや	あまり	全然	合計	人数
		あてはまる	あてはまる	あてはまらない	あてはまらない		
男性	具体的な記述あり	44.8%	43.3%	9.4%	2.4%	100.0%	614
	「特になし」	25.6%	45.0%	24.9%	4.5%	100.0%	515
女性	具体的な記述あり	49.2%	39.3%	10.1%	1.4%	100.0%	771
	「特になし」	28.5%	46.4%	20.7%	4.3%	100.0%	347

注: 男性:  $\chi^2=72.469$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=3$ 女性:  $\chi^2=55.512$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=3$ 

なデータの分析を通じて、現在の日本社会を生きる30～40歳代の未婚者たちの姿を描き出すことをめざす。具体的には、公益財団法人家計経済研究所が2015年3月に実施した「未婚者の生活と意識に関する調査」（以下、本調査と略す）に含まれる、自由回答の記述が考察の主な対象である<sup>2)</sup>。未婚者たちによって記された言葉から見えてくる彼ら／彼女らの意識を、特に将来に対する不安に注目しながら、以下では考察していく。

## 2. 自由回答にみる

### 30～40歳代未婚者の意識（1）

#### （1）質問項目と「特になし」

本調査では、全体の最後に、「ご自身の今の生活や将来について、お考えになっていることをご自由にご記入ください」という、自由記述の質問を設けている。これ以上の記載や指定は一切なく、回答者が自由に考えを述べることができるようになっている。この質問になされた回答を、以下で

は「自由回答」と一括して表現することにし、ここではこの自由回答における記述（記された言葉）を、30～40歳代の未婚者たちの意識を表すものとして分析していくことにする。

この質問では無記入は認められていないため、すべての回答者が何らかの記述をしているが、「特になし」などとだけ記入し、具体的な記述が一切ない回答者も多い。以下、「なし」「無い」なども含め、具体的な記述がないものをすべてまとめて「特になし」と呼ぶことにすると、「特になし」の割合は、男性で全体の45.6%（515人）、女性で31.0%（347人）にも達する。具体的な記述内容の分析に入る前に、この「特になし」と回答した人たちについて検討しておこう。

「特になし」と回答した人と、それ以外の人（何らかの具体的な記述を回答している人）の間には、女性よりも男性で「特になし」の割合が大きい以外、仕事の状況・年取・学歴といった主要な基本属性に関しては、特に有意な差はみられなかった<sup>3)</sup>。ただし、意識に関する回答に関してはそうではなかった。

図表-3 自由記述で用いられている単語(男性)

(30～34歳男性)			(35～39歳男性)			(40～44歳男性)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
不安	35	17.0%	不安	30	14.7%	不安	38	18.6%
生活	22	10.7%	将来	24	11.8%	将来	24	11.8%
結婚	22	10.7%	生活	16	7.8%	仕事	18	8.8%
今	19	9.2%	今	15	7.4%	今	17	8.3%
将来	15	7.3%	仕事	15	7.4%	生活	14	6.9%
仕事	15	7.3%	収入	12	5.9%	自分	9	4.4%
収入	10	4.9%	結婚	10	4.9%	結婚	8	3.9%
自分	10	4.9%	自分	9	4.4%	収入	8	3.9%
貯金	10	4.9%	親	8	3.9%	貯蓄	7	3.4%
老後	9	4.4%	貯蓄	7	3.4%			
親	8	3.9%						
今後	8	3.9%						

注: 1)「ケース数」は、自由記述の内容にその語が含まれていたケースの数

2)30～34歳・35～39歳・40～44歳のケース数は、それぞれ206、204、204(いずれも、具体的な記述があったもののみ)

3)「割合」は、具体的な記述があったケース数(注2に示したもの)に対する、その語が含まれていたケースの割合

4)「割合」が3%以上のもののみを掲載している

例えば、生活満足度に関して男女別にみると、「特になし」とだけ回答した人は、何らかの具体的な記述を回答している人と有意に差があり、「特になし」の人たちの方が「不満である」と「どちらかといえば不満である」の割合が低く、「どちらともいえない」の割合が高い(図表-1)。また、「将来に対して不安を感じる人が多い」という質問に対しては、「特になし」の人たちはそれ以外の人たちに比べて、明らかに不安を感じる割合が低い傾向がみられる(図表-2)。いずれの結果も、男女別に加えて年齢層を3つのカテゴリー(30～34歳、35～39歳、40～44歳)に分けて分析しても、多くの場合で有意な差が検出された。

「特になし」と回答した人たちは、そうでない人たちに比べて、主要な基本属性に特に差はないものの、生活に不満を感じる人の割合は相対的に少なく、満足とも不満ともいえないという人の割合が高い。そして、将来への不安を感じることも相対的に少ない。満足や安心とまではいえないものの、不満や不安が相対的に希薄な人の割合が高いということになる。逆に言うと、自由記述に何らかの具体的な記述をしている人たちは、相対的に生活への不満や将来への不安を感じている人の割合が大きいということになる。以下で自由記述

の内容を具体的に検討する際には、この点をふまえて考えていく必要があることを確認しておきたい。

## (2) 自由回答における単語の出現頻度

以下では、調査の最後にたずねた「ご自身の今の生活や将来について、お考えになっていることをご自由にご記入ください」という質問に対してなされた回答について、その具体的な内容を検討していく。つまり、「特になし」としか記述されていなかったケースを除いた、1,385人(男性614人、女性771人)の記述が対象となる。具体的な記述があったケース(以下、「記述ありのケース」と略す)が全体に占める割合は、61.6%(男性では54.4%、女性では69.0%)である。

まず、自由回答のテキストデータから、単語ごとの出現ケース数および記述ありのケースに占めるその割合を、男女別および年齢カテゴリー(30～34歳/35～39歳/40～44歳)別に集計した(図表-3、図表-4)<sup>4)</sup>。これは、個々の単語がどのくらいの割合で自由記述の中で用いられているかを示している<sup>5)</sup>。

これはあくまで単語の出現頻度を調べたものであり、例えば「不安がある」という記述であって

図表-4 自由記述で用いられている単語(女性)

(30～34歳女性)			(35～39歳女性)			(40～44歳女性)		
語	ケース数	割合	語	ケース数	割合	語	ケース数	割合
不安	59	22.0%	不安	61	24.9%	不安	63	24.4%
結婚	51	19.0%	結婚	34	13.9%	生活	35	13.6%
仕事	27	10.1%	将来	28	11.4%	将来	33	12.8%
将来	24	9.0%	生活	28	11.4%	老後	25	9.7%
今	21	7.8%	今	22	9.0%	仕事	23	8.9%
生活	18	6.7%	仕事	17	6.9%	今	23	8.9%
お金	16	6.0%	老後	17	6.9%	自分	17	6.6%
子供	16	6.0%	収入	15	6.1%	結婚	15	5.8%
貯金	13	4.9%	自分	14	5.7%	収入	14	5.4%
自分	12	4.5%	子供	13	5.3%	親	13	5.0%
老後	9	3.4%	親	12	4.9%	心配	13	5.0%
収入	9	3.4%	年金	10	4.1%	お金	12	4.7%
心配	9	3.4%	お金	9	3.7%	健康	11	4.3%
介護	9	3.4%	心配	9	3.7%	年金	8	3.1%
好き	9	3.4%	健康	9	3.7%			
親	8	3.0%						
貯蓄	8	3.0%						

注: 1)「ケース数」「割合」の定義は図表-3と同じ  
 2) 30～34歳・35～39歳・40～44歳のケース数は、それぞれ268、245、258(いずれも、具体的な記述があったもののみ)  
 3)「割合」が3%以上のもののみを掲載している

図表-5 結婚に関する意識

性別・年齢層	まもなく結婚することが決まっている	すぐにも結婚したい	今は結婚したくないが、いずれはしたい	よい相手がいれば結婚してもよいが、必ずしもしなくてもよい	結婚をするつもりはない	合計	人数
男性 30～34歳	4.6%	14.4%	24.9%	30.6%	25.4%	100.0%	399
35～39歳	4.0%	12.5%	20.3%	36.0%	27.2%	100.0%	375
40～44歳	2.5%	12.6%	12.9%	40.8%	31.2%	100.0%	365
女性 30～34歳	7.4%	24.1%	22.0%	31.6%	14.9%	100.0%	377
35～39歳	5.1%	24.1%	14.6%	35.9%	20.3%	100.0%	370
40～44歳	2.7%	13.2%	10.2%	43.9%	29.9%	100.0%	371

注: 男性:  $\chi^2=25.250$ ,  $p=.001$ ,  $d.f.=8$   
 女性:  $\chi^2=67.519$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=8$

も「不安がない」という記述であっても、「不安」という言葉が等しく出現したとしてカウントしているため、この集計結果だけから過度の解釈に踏み込むことには慎重になる必要がある。しかしそれでも、大まかな傾向をみることができる。

まず、「不安」は男女・年齢層問わず、回答者たちの今の生活や将来について語る上で、最も主要なキーワードとなっている。30～34歳の女性に関しては、「結婚」も「不安」に迫る高い割合となっ

ているが、これ以外の年齢層は男女ともすべて突出した割合で「不安」という語が語られていることがわかる。類似した表現である「心配」の割合まで加えると、男性では30～34歳・35～39歳・40～44歳でそれぞれ18.4%・16.7%・20.6%、女性ではそれぞれ25.4%・28.6%・29.5%とさらに高い割合になる。

自由回答とは別に、「将来に対して不安を感じる人が多い」という文が自分にあてはまるかを直接

たずねた質問への回答をみても、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答する人の割合は圧倒的に高く、男性でそれぞれ36.0%・44.1%、女性で42.8%・41.5%である<sup>6)</sup>。自由回答において「不安」が多用されていることの背景には、このような将来への不安感の広がりがあるといえる<sup>7)</sup>。

もう一つ、注目される語として挙げられるのが「結婚」である。「結婚」の割合は、男性では30～34歳・35～39歳・40～44歳でそれぞれ10.7%・4.9%・3.9%となっており、30～34歳で比較的高かったが、35～39歳以降では半分以下に下がっている。一方女性では、30～34歳では最も多い「不安」に迫る19.0%にも達し、35～39歳では13.9%まで下がるものなお2番目に多い語であるが、40～44歳では5.8%にまで大きく下がる。結婚というものが、現在や将来の生活に関して主要な関心からいわば退いていくタイミングが、男性と女性で差があることが示唆されているのかもしれない。また、男女とも40歳代以降では、現在や将来の生活を考える上で、結婚は特に大きな要素ではなくなっていることもうかがえる。

これについても、結婚に関する意識をたずねた別の質問項目の結果を参照しておこう。自らの結婚について、「まもなく結婚することが決まっている」「すぐにでも結婚したい」「今は結婚したくないが、いずれはしたい」「よい相手がいれば結婚してもよいが、必ずしもしなくてもよい」「結婚をするつもりはない」という選択肢の中から一つを選んでもらう質問の結果を、図表-5にまとめている。男女とも、年齢層が上がるにつれて徐々に結婚への意向が弱くなっていく傾向がうかがえるが、女性については35～39歳と40～44歳の間で相対的に大きな差があることがわかる（前者に比べて後者で、「すぐにでも結婚したい」が10%以上低く、「結婚をするつもりはない」が10%弱高い）。女性の自由回答での「結婚」という語の登場割合と、共通する特徴がみられる。

永井・久木元（2016: 2）で、結婚は「着実に『30歳代での経験』になりつつある」と書いたが、以上の結果からは、その一方で結婚は40歳代での経験にはなりにくいままであることが示唆される。

結婚の「適齢期」という考え方はもはや強調されなくなっているとはいえ、年齢は結婚をめぐる意識に確実に影響を与える要素であり続けているようである。

以上を参考にした上で、以下では具体的な記述をとりあげて考えていく。

### 3. 自由回答にみる 30～40歳代未婚者の意識（2）

#### （1）ポジティブな将来

ここからは、自由回答の記述をより具体的に検討していく<sup>8)</sup>。

上述のように、自由回答の記述で「不安」が最も頻出する語であるといっても、自由回答のすべてが不安や心配に満ちた内容というわけではない。多数派とはいえないものの、自らがめざす将来の姿、こうなりたいと希望する将来の姿を語る例もみることができる。

例えば、具体的な仕事上の将来像を描くものや、今の仕事で邁進することを語るものがある。

「現在の仕事は職種としては魅力的で自分に合っていると思う。よりよい仕事内容、待遇を得るために数年内の転職（職種は同じ）を考えている。そのための準備として資格取得をしたり、通信教育で学んだりしている」（30歳女性）

「現在は美容院でネイルサロンをしていたり、友人のサロンで働いているのですが、自宅でネイルサロンを開くのが夢です」（31歳女性）

「3年後看護師になる」（32歳女性）

「やっとパートで働ける所をみつけて働き始めた。当面は働き続けることが目標。いずれは正社員になりたい」（36歳女性）

「基本的に現在つとめている会社に不満は無いので、どんどんステップアップしていきたい」（32歳男性）

女性の場合、結婚やその後の生活を思い描くものもみられる。以下の2つがその例だが、いずれも回答者は30歳代後半である。かつてなら、こう

した内容はより若い年齢で語られたであろうことを考えると、結婚や出産が30歳代の後半も十分に含む時期の経験になっていることがうかがえる。

「今、付き合っている彼氏と結婚して、子どもが生まれ、一戸建ての家を購入して、生活したいです。結婚式も、できたらしたいです」(36歳女性)

「結婚しても現在の職場で仕事を続け、子どもができたら産休をとって仕事を続けたい」(38歳女性)

また、現在の自らの生活に一定の満足感があり、そこからの変化を強く望むわけでもなく、現在の状況が続くことを希望する声もみられる。

「正社員ではなく結婚をするつもりもなく、親に甘えている自覚は大いにあるが、生活必需品以外に欲しい物もなく今の収入で何不自由なくやれているので、今後も無理はせず自分らしくマイペースに生きていきたい」(35歳女性)

「今の実家住まいのままで、このまま生活スタイルを変えないで平々凡々と暮らせればいいと思う」(42歳女性)

「独身でさびしいと感じることはあるが、今の生活も悪くはないと思っている」(42歳男性)

「今まで生きてきて一番良い状態。このまま可能な限り良い状態を保って生きていきたい」(44歳男性)

以上のような言葉を語る未婚者たちも、現在の生活や将来に関して一切の不安がないわけではないだろうが、こうしたポジティブな展望や現状への一定の満足感をもって日々を営んでいる未婚者たちがいるという、ある意味では当然のことも確認しておきたい。

## (2) 語られる結婚・出産

未婚者にとって、結婚は必ずしも主要な関心事であるとは限らないのは、すでに上記でふれた通りである。とはいえ、結婚への思いを語る例が少なくないのも事実である。特に女性の場合、結婚だけ

でなく出産にもあわせて言及する例がしばしばみられる。

「結婚して、子どもが欲しい。できれば35歳までに子どもが欲しいが今の相手がどう思っているのか不安。考えてないなら、次を探さないといけませんが、別れる決心がつかない」(32歳女性)

「結婚して子どもを欲しいと思っているが、良い相手と巡り会う機会が無い」(33歳女性)

「子どもも欲しいし結婚もしたい。年齢も限界なので早めに出産して家庭を作りたい」(38歳女性)

また、結婚することが親の安心につながると語る例もみられる。結婚それ自体もそうだが、出産すること・家庭を築くことまで実現することで、一層親を安心させたり喜ばせたりすることになる(と想定されている)という例もある。結婚すること、親になること、家庭を築くことは、今でも根強く自立の指標としてみなされていることがうかがえる。それは同時に、結婚していないことは親に不安と心配を抱かせるものであると、これも今でも根強くみなされているということでもある。結婚をめぐる選択は、どのような選択であれ、当事者の個人的な生き方の選択に還元しきれないのであり続けている。

「早く結婚して両親を安心させたい」(35歳女性)

「将来は子どもはなくていいので結婚して親を安心させたい」(36歳女性)

「早く孫の顔を見せてやりたい」(39歳女性)

「何とか結婚して、親を安心させたい」(43歳女性)

「早く相手を見つけて結婚して、親を安心させたい」(34歳男性)

「ちゃんと結婚して子どもをもうけ、社会に認められるような家族(一般的な家庭)を築くこと。そして、親を安心させる」(38歳男性)

ただ、特に女性に関して、「結婚して出産する」という歩み方以外を語る例もみられる。以下のは、結婚も出産も望まない例、出産のみを考え

ることがあるという例、すでに子どもがいる相手との結婚でも構わないという例である。このように、どのような関係のあり方を望むかは、決して典型的なあり方だけに限られるわけではない。

「結婚は絶対したくない。子どもも絶対産みたくない。だけど、恋人はほしい」(32歳女性)

「結婚願望はないが、子どもは欲しいと思うことがある」(37歳女性)

「もうすぐ40歳なのでシングルマザーでよいので、子どもを産みたい」(39歳女性)

「家族をつくりたい。結婚を考えていなかったが、子持ち[の相手]でもいいので新しい絆を築きたい」(44歳女性)

そもそも、未婚であり続けているからといっても、必ずしも積極的に未婚というあり方を確信をもって選んだというわけではなく、結果として未婚のまま今の年齢まで進んできたというケースこそがむしろ多いと考えられる。したがって、このまま未婚であり続けていくことや、そのまま進んだ先への不安がよぎることも当然ある。

「今後結婚できるか不安だ」(44歳男性)

「将来は結婚を望んでいるが、現在はチャンスがないので不安に感じている」(35歳女性)

「この先結婚できるか不安。自由はあるが、一生一人は寂しいと思う」(39歳女性)

「年齢のことを考え始めて、結婚について少し真剣に考えるようになった。このまま一人でいると、老後が心配になる」(39歳女性)

そしてまた、そうであるからこそ、もし機会があるのなら結婚に進むこともありうるし、これまで続けてきた独身での生活をさらに続けることも、悪い選択ではないとして同等にみることができる。

「独身でさびしいと感じることはあるが、今の生活も悪くはないと思っている」(42歳男性)

「縁があれば結婚しても良いが、このままひとり

でも特に問題はないと思っている」(42歳女性)

誰もが結婚すべきという発想に立たないということは、結婚という選択自体を一切選ばないと最初から決めているともみなさないということである。未婚でいる人たちに対して、外から見る視点が一歩しばしば結婚と未婚の間に強い線引きをしてしまうことと、そのことを相対化することの必要性を、上の例は示している。

#### 4. 自由回答にみる

##### 30～40歳代未婚者の意識(3)

###### (1) 不安の要素——仕事

本稿の冒頭や2節でふれたように、今回の自由記述で一番多くみられた語は「不安」である。不安の内容は、「自分の将来がどうなっていくか見通しができず、漠然とした不安感がある」(35歳女性)のように、将来に対する漠然とした不安を述べる例も少なくないが、具体的な不安の対象にふれて不安を語る例も多々みられる。

あえて大きく整理するならば、それらの不安が何に関するものなのかについて、「結婚」「仕事の状況やキャリア」「経済的状况」「親の状況」「健康」「老後」などに分けることができる。実際には、こうした個々のものについての不安を単独で抱いているというよりは、複数重なっていることも多い。

結婚についてはすでに上でふれたので、仕事をめぐる不安をまず取り上げよう。まず、パート・アルバイト・派遣など、非正規雇用で働いていることに伴う将来の不安を語る例は、非常に多い。多くは今の仕事が続けられる保障のなさゆえの将来の不安を述べているが、給料の低さや保障の弱さなど待遇の問題にふれる例もある。

「非正規労働者で将来が不安」(41歳男性)

「非正規雇用でいつ辞めさせられるかわからないので、将来が非常に不安です」(31歳女性)

「派遣で仕事をしているが、安定せず将来が不安である」(31歳女性)

「非正規雇用なので将来がとても不安だ。もう少し毎月の給料が上がってくれたらと思う」(37歳女性)

「パートなので、ボーナスや保険、保障が何もない。年齢を重ねるにつれて不安でたまらない」(40歳女性)

「仕事が毎年不安定で簡単に雇い止めにされるうえに低賃金。はっきりいって『モノ扱い』されていると感じる。貯金も増えないので将来は大いに不安だが、今のことで精一杯でそこまで考える余裕はない」(37歳男性)

他方で、正規雇用で働いていけば不安がないかという、決してそういうわけでもない。勤め先の会社自体が不安定になりつつあることや、その中で補助の打ち切りや給料の低さに直面している不安と不満もみられ、正規雇用であるからといって不安の不在を意味するわけではないことが示されている。

「会社の将来が暗いのが不安。5年後には自分の働いている支店がないかもしれない」(33歳男性)

「入社時は転勤がない話だったが、会社の都合で転勤になった。転勤後、親会社に合併となり、転勤者の家賃補助は7年で打ち切りとのこと。今現在、元々勤務していた事務所がなくなったわけではないが、いつ、その事務所がなくなされるかも不明だし、今後、戻れる可能性もあるわけではない。家賃補助が打ち切りになるなら、家賃を自己負担できるほどの収入はないので辞めることを前提に働いているが、年齢的な問題もあり、次の仕事に就けるか不安しかない。何年働いても、初任給から手取りが増えないので働き甲斐もない」(41歳女性)

「43歳・主任・中途採用3年目・残業なしの手取りは19万円。残業ありで最高28万円。年2回のボーナス1カ月分。これでは退職時退職金は微々たるものであるので将来不安になります」(43歳男性)

仕事の状況の困難さを語る例は少なくない。長時間労働であることに加え、非正規雇用であるた

めの不安定さや給料の低さが重なり、将来展望が持ちにくくなっている。

「サービス残業・出勤が日常化していて、体調も悪くなり、医療費が増え、生活も苦しい。もうすぐ、契約が満了になり、失業するので、本当に困っている」(33歳女性)

「平日は仕事に追われて朝6時すぎに出勤して夜は23時すぎに帰る生活なので、ほとんど仕事に時間をとられてしまい、自分の時間がありません。夕飯を食べてちょっとゆっくりしたらもう2時とかになってしまうので、寝ないと翌日に影響が出てしまうのでバタバタとしてしまっています。休日は平日の疲れを取るかのように寝てしまうので、1日を無駄にしまっています。こんな生活をいい加減改善したいのですが、なかなかうまくいかない状況です」(38歳女性)

「正社員がいない部署で正社員同様に働いているのに、不安定な派遣の立場で、交通費もボーナスもなく、手取り月給13万円程度では、一人暮らしの生活はかなりきついし、貯金もできない。正社員の職を探すにしても、そもそも正社員の求人が少ないし、……将来に希望が持てない」(44歳女性)

「給料が安く、生活を維持するだけで精一杯のため、先のことを全然考えられないのが現状です」(33歳男性)

無論、働いている人のすべてが大変な状況で仕事をしているわけでは決していだらう。しかし、以下の例のように、たとえ現在の状況が心配のないものであったとしても、そのことがそのまま将来にわたって不安のない状況を保障するわけではないと感じられている。長期的な展望を抱きにくい状況が続く中で、結果として広範な人たちに不安が抱かれることになっているのかもしれない。

「現在の生活には不安はないが、5年後、10年後を考えると全く想像できないことが不安」(35歳男性)



こうした中で、少数ではあるものの、特に男性に関して、「リタイア」「隠居」といった語を通じて、働くこと自体から離れたいと記すケースもみられている。久木元（2011）でも同様の例がみられたことを指摘したが、仕事の状況における展望の持ちにくさと、不安定な状況を脱して将来の不安を解消したいという思いが重なる形で語られる言葉であると考えられる。資産運用や家賃収入などの不労所得で暮らすイメージが語られるのも、地道にこつこつ仕事をしていくという生き方への信頼が失われつつあることの反映といえるかもしれない。

「40歳くらいでリタイアし、その後は株等の資産運用で生きていきたい」（32歳男性）

「早く隠居したい」（37歳男性）

「家賃収入で生活したい」（38歳男性）

「人生において労働時間は無駄なので早くお金をためて若いうちから隠居生活したい」（38歳男性）

「資産を築いてさっさと退職したい」（39歳男性）

「早くリタイアしてのんびりしたい」（40歳男性）

仕事や働くことをめぐる不安は、現在のみならず将来への不安と直結している。働くこと自体から離脱したいという声の存在は、仕事をめぐる不安の解消、特に長期的な観点での不安の解消が強く求められていることを示唆している。

## (2) 不安の要素——親の介護

「親の介護をしながら生活していけるか漠然と不安である」（42歳女性）のように、未婚者たちの中には、将来の親の介護への不安を語る例もみられる。特に親と同居しているケースや、経済面などで親の力を借りざるをえないケースでは、将来親が介護が必要になる事態は大きな問題となりうるため、将来の不安として親について言及されることがある。

しかし中には、まだ少数ながら、すでに親を介護している例もある。介護そのものの苦労もあるが、介護に伴い生活上の余裕がなくなっていくこ

とが吐露されている。

「母親が入院中で要介護5と認定され、この先ともに暮らすのは困難。施設や転院を考えなければならず、気苦労が絶えない」（42歳女性）

「親の介護等により貯蓄ができない」（36歳男性）

「結婚したいが、相手もいなく、母の介護で精一杯で自分の人生が考えられない」（41歳男性）

## (3) 不安の要素——病気

本調査では、対象者の健康状態について、「よい」「まあよい」「ふつう」「あまりよくない」「よくない」の5段階から選んで回答してもらう質問を行ったが、「よくない」と回答した人の割合は、男性では全体の5.9%、女性では4.1%であった。この割合だけを見ると、健康状態のよくない人は決して多数ではないように見えるが、自由回答の中で自分の病気に言及する例をみると、人数は多くないものの、病気による生活への影響の大きさが無視できないケースが少なくない。

病気ゆえの生活上の困難や将来の不安を語る例としては、以下のようなものがある。病気の経験は、やはり将来についてポジティブに考えることを難しくすることがあるようである。

「うつ病で精神的に、糖尿病で肉体的にも病んでいる状態で、明るい将来が見えないと考えています」（31歳女性）

「病気療養中のため、それがよくならないうと、あまり将来について考えられず、考えればただ不安が襲うだけで、ストレスになるので、今は嫌だと思ふことはやらないようにしています」（37歳女性）

「病気がちで手術を控えている。何度も入院していて長生きするとは思えないが、生きてしまったときのことを考えると絶望しかない。親より早く死にたいが、親を送ることが義務だとも思うのでなんとか頑張るしかないだろう」（44歳女性）

「精神的な病気のため、憂鬱になりやすく、いろいろと片づけられないといけないうことが溜まっていて、気分が重い、まずは溜まっていることを処理しな

図表-6 健康状態と年収

性別	年収	健康状態					合計	人数
		よい	まあよい	ふつう	あまりよくない	よくない		
男性	50万円未満	4.1%	17.5%	43.3%	21.6%	13.5%	100.0%	171
	150万円未満	6.6%	22.1%	34.6%	27.9%	8.8%	100.0%	136
	200万円未満	8.4%	28.4%	31.6%	23.2%	8.4%	100.0%	95
	300万円未満	8.4%	27.1%	41.6%	18.7%	4.2%	100.0%	166
	400万円未満	10.6%	29.3%	42.3%	14.9%	2.9%	100.0%	208
	500万円未満	11.1%	26.1%	42.5%	17.6%	2.6%	100.0%	153
	500万円以上	12.5%	29.5%	41.5%	13.0%	3.5%	100.0%	200
女性	50万円未満	7.3%	27.1%	34.4%	21.9%	9.4%	100.0%	192
	150万円未満	6.8%	28.2%	35.0%	23.9%	6.0%	100.0%	234
	200万円未満	10.3%	30.2%	37.3%	19.0%	3.2%	100.0%	126
	300万円未満	12.8%	41.9%	32.6%	11.5%	1.3%	100.0%	227
	400万円未満	11.2%	39.2%	31.5%	14.7%	3.5%	100.0%	143
	500万円未満	19.4%	38.7%	30.1%	9.7%	2.2%	100.0%	93
	500万円以上	21.4%	42.7%	27.2%	8.7%	0.0%	100.0%	103

注: 男性:  $\chi^2=62.232$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=24$

女性:  $\chi^2=83.748$ ,  $p=.000$ ,  $d.f.=24$

いとほかのことに集中できそうもない」(37歳男性)

特に注目されるのは、病気が理由で仕事につけなかったり、仕事に強い制約が伴ったりするケースである。仕事をめぐる困難と不安についてはすでにふれたが、そこに病気という要素が加わることによって、複数の困難を有することになり、一層当事者の悩みは切実なものとなっている。働き盛りの、重要なキャリア形成の時期に、本人の責任には還元しきれない病気という理由のために十分な仕事ができなくなっていることによって、強い不安感や残念な思いや諦念を抱かざるをえない例もみられる。キャリアが中断されてしまうことで、今後病気から回復した後の展望も描きにくくなり、それがまた不安にもつながっていく面もあるようである。

「うつ病がなかなか治らないので、就職活動ができない。このまま治らなかつたらどうしよう」(35歳女性)

「持病が再発してから3年になるが、完治というより現状維持が続いているため遠出の外出や長時間で働くことが困難だ。その間に私以外の家族は高齢者になり、身体の痛みや心の痛みを抱えなが

ら介護をしなければならないのは正直苦痛でこの先が不安だ」(36歳女性)

「持病のため入退院を繰り返しています。フルタイムでの勤務は難しいのです。親のすねをかじっているのは自分でも情けないと思います。将来は不安だらけです」(38歳女性)

「持病があって、定職につけない。このまま母親が老いて自分が介護して、人生終わっていくのだろう」(40歳女性)

「現在持病があり、フルタイムでの勤務が難しいため、パートタイムで働いているが、体調が良くなればフルタイムで働いて、もっといい給料を得たいと考えている」(44歳女性)

「今は病気で働けないから楽しめることは犠牲にしない。将来は考えても無駄」(37歳男性)

「うつ病になり、じゅうぶんな仕事ができない。転職するための業績が積めない」(41歳男性)

「慢性疾患を抱えており、治療に日中のほとんどをかけている。在宅での仕事以外に選択肢がなく、収入も非常に少ないために親世帯からの独立のめどが立たない。親戚を含めて人付き合いもほとんどできず、能力・資格共に活用できない状態。将来が全く見えない」(42歳男性)

「脊椎系の特定疾患もあり、現在は身体面の状

態があまりよくなく手術をするかもしれないため、回復具合をみないと将来のことはわかりませんが、後年の進行もあり得ますし居宅でも可能な職やスキルの習得を考えています」(43歳男性)

上でふれた、自らの健康状態について「よい」「まあよい」「ふつう」「あまりよくない」「よくない」の5段階から選んで回答してもらった結果を、回答者の年収との関連で分析すると、年収と健康状態は強く関連しており、男女とも年収の低いことと健康状態が「よくない」ことが結びついていることがわかる(図表-6)。病気になることと仕事の困難が結びつくことで、経済的な困難などの社会的な不利益を帰結する可能性が高くなってしまいう実情があることがうかがえ、病気と健康を、個人の問題に還元すべきではなく社会的な問題として考える必要性があることが、自由回答からも、図表-6の結果からも示唆されているといえよう。

## 5. 課題の所在

以上のように、30～40歳代の未婚者たちが記した自由回答について、特に「不安」に注目しながら検討を行ってきた。ここまでの検討から、どのような課題が浮かび上がってきたのかを、最後に考えることにしよう。不安が多く語られる状況に対して、何が求められているのだろうか。

まず、仕事をめぐる不安が将来の不安に大きく関わっていることから、仕事に関する不安定要因が少しでも減らせる方向性の模索は強く求められ、さまざまな立場からさまざまなアプローチで、一層取り組みを進める必要があるだろう。

特に、非正規雇用でのキャリアしか積めずに40歳代を迎えているケースや、本人の病気や親の介護などのやむをえない事情でキャリア形成を中断したケースなどに関して、新たにキャリアを形成していける道筋を社会の中でつくっていくことは、非常に重要であると考えられる。自由回答の中に、「貯蓄がないので、これから貯蓄できるよう少しでも時給の良い仕事をしたい」(43歳女性)という言葉があったが、これは40歳代でのキャリアの転

換が、「よりよい時給の仕事をする」という程度の自由度しかない状況をうかがわせる語りである。また、「うつ病になり、じゅうぶん仕事ができないう言葉は、病気の影響でのキャリア形成の中断や停滞が、その後の可能性を制約してしまうリスクがある状況を示している。

「やむなく非正規 41歳不安」と題されたある新聞記事(朝日新聞 2016)は、40歳前後の非正規労働者の増加と、そうした層への支援の施策の乏しさを指摘している。新卒で正社員として採用された企業で定年まで働くというキャリアのあり方をモデル視できなくなった現在、キャリア形成を始める年齢のタイミングを限定しない、いわば「年齢フリー」なキャリア形成を可能にしていくことが必要になっているのではないだろうか。そのためには、40歳代からの非正規労働者の正規化を進めることもあるだろうが、非正規雇用のままであっても長期的な展望を持てるような、期間を限定しない雇用のあり方も検討されてよいのではないだろうか。また、採用のあり方の再検討だけでなく、より柔軟で充実した職業訓練の機会の提供なども必要かもしれない。

また、病気と健康の問題への対応も、考えなければならない課題であるのは確かであろう。病気によりキャリア形成を中断せざるをえなかった人たちに対して、健康への配慮と改めてのキャリア形成が両立できるような方策が必要とされているのではないだろうか。それは同時に、病気や健康だけにとどまらず、親の介護なども含めた、さまざまな事情を抱えながらキャリア形成をしていくという新しいモデルをつくっていくことでもあるだろう。

もう一つは、独身であることにより照準した点として、未婚のままで迎える高齢期について、社会の中で多彩で豊かなイメージをつくりあげていくという課題である。実は、自由回答で老後の生活の不安が語られる中で、以下の例のように「孤独死」に言及されることがある<sup>9)</sup>。

「独身を謳歌しているが、最後は孤独死かと思

うとゾツとする」(37歳女性)

「孤独死に向かってまっしぐらなので、迷惑をかけない最期の迎え方や場所を考えて模索している」(39歳女性)

「独身で資産もないので、老後は室外での生活や孤独死になると思う」(42歳女性)

「惰性で過ごして、将来は孤独死」(38歳男性)

「高齢化社会になりましたが、どれくらいまで働くことができるかとか、孤独死してしまうのだろうかと将来に関しては明るいイメージは無い現状です」(44歳男性)

だが、これらだけを見ると孤独死への不安が印象づけられるかもしれないが、自由回答全体としてみると、そもそも独身での高齢期のイメージ自体が具体的に描きにくいということこそが指摘できる。自由回答で「老後」という言葉は多く用いられているが<sup>10)</sup>、その多くは老後の生活の経済面での不安や、それに向けての対応を語るものであり、具体的な老後の生活のイメージを語る例はごくわずかである。もちろん、30～44歳の時点では、自らの高齢期のイメージを具体的に思い描くことはそもそもあまりないかもしれないが、それにもかかわらず、死についてだけは「孤独死」という形で語られているのである。

日本社会の中で、未婚者の存在感が小さいものではなくてきたとはいっても、高齢の未婚者についてはまだそうはなっていないのかもしれない。そのために、独身での高齢期のイメージとして、孤独死ばかりが浮かび上がってきてしまうという可能性はないだろうか。

仮にそうならば、未婚のまま迎える高齢期について、いろいろな生き方やモデルやライフスタイルがありうるということが知られてもいいと考えられる。孤独死以外の、より豊かで具体的なイメージが未婚者の高齢期に対して描けるようにしていくことで、はじめて未婚で生きる人生の全体像を構想できるようになるのかもしれない。

晩婚化・未婚化・少子化・高齢化といった言葉で、日本社会の変化がしばしば語られるが、少なくとも未婚で人生を送るという経験については、私た

ちは今なお十分に具体的な想像力を手に入れている。自由回答から浮かび上がってくるのはそのことであり、私たちはまさにその途上にあるといえよう。

#### 注

- 1) 具体的な統計データについては、永井・久木元 (2016) で参照している。
- 2) この調査は、全国の30～44歳の男女2,247人(うち男性1,129人、女性1,118人)を対象に、家計・仕事・親との関係・社会的ネットワークなど、彼ら/彼女らの生活の状況や意識について多面的にたずねた調査である。調査の目的や概要については、本号の永井・久木元 (2016) を参照。
- 3) こうした自由記述の質間で、男性よりも女性の方が記述がなされる割合も字数も多く、「特になし」などの具体的な内容のない回答をする人の割合が低くなることは、筆者がこれまで実施した調査(25～39歳の未婚男女、60～69歳の男女)でも共通にみられた特徴である(久木元 2011; 2014)。
- 4) ここではケース数に注目しているため、ある1人の回答者の自由記述において、特定の単語が複数回用いられている場合でも、ケース数は1として扱っている。
- 5) 実際には「する」「なる」「ない」といった単語の頻度も多いが、ここではキーワードを探索するという観点から、名詞に限定して集計している。
- 6) 「記述あり」のケースに絞ると、「将来に対して不安を感じる人が多い」という文が「あてはまる」「どちらか」というとあてはまる」と回答する人の割合はさらに高くなり、男性でそれぞれ44.8%・43.3%、女性で49.2%・39.3%となる。
- 7) なお、筆者が2009年に実施した、関東在住の未婚男女に対する調査で同じ質問をたずねているが、本調査と重なる30～34歳および35～39歳についてみると、「あてはまる」「どちらか」というとあてはまる」の合計割合は、2009年の調査では男性はそれぞれ84.6%・82.6%、女性は82.6%・86.7%であった。単純に比較できるか議論の余地はあるものの、本調査の結果(男性で30～34歳・35～39歳それぞれ80.0%・79.7%、女性で87.0%・85.1%)が極端に高い割合ではないことが示唆される。
- 8) 自由回答の引用に際しては、読みやすさを考慮し、文意に影響しない範囲で表記を修正していることがある。
- 9) 自由回答の中で「孤独死」に言及しているのは、16ケース(男性6ケース、女性10ケース)である。
- 10) 自由回答の中で「老後」に言及しているのは、76ケース(男性23ケース、女性53ケース)である。

#### 文献

- 朝日新聞, 2016, 「やむなく非正規 41歳不安」2月4日付朝刊3面。  
久木元真吾, 2011, 「不安の中の若者と仕事」『日本労働研究雑誌』612: 16-28。

- , 2014, 「60歳代の人々の生活と意識」『季刊家計経済研究』104: 49-59.
- 永井暁子・久木元真吾, 2016, 「未婚者の生活と意識に関する調査」の概要『季刊家計経済研究』110: 2-7.

くきもと・しんご 公益財団法人 家計経済研究所 次席研究員。主な著書に『グローバル人材とは誰か——若者の海外経験の意味を問う』（共著, 青弓社, 2016）。社会学専攻。(kukimoto@kakeiken.or.jp)